

学位申請論文
東アジア ネジ産業研究
—日本・台湾・中国 基盤技術産業の発展と競争
近藤淳

要約

ネジ産業は、日本のフルセット産業構造を支えてきた、基盤技術産業の一つである。本研究の課題は、ネジ産業に対して産業としての位置づけを行うことである。課題を平易に述べれば、日本及び、アジアのネジ産業は、どのような背景の中で、どのようにして生まれ、どのように広がり、どのように競争力をつけて行くのかを明らかにすることと言える。

ネジは中間財である為、ネジ産業の研究は、需要産業との関係を念頭に置いて論じなければならないだろう。近年、ネジ産業の主たる需要家である組立産業においては、グローバル生産とグローバル販売が進行している。当然のことながら、需要産業におけるネジの調達も、グローバル化に向かっている。そこで本論でも、日本のネジ産業のキャッチアップ国（地域）である、台湾・中国の同産業を含め、東アジアのネジ産業を分析の対象とした

ネジ産業の研究は、二つの観点から意義があると考えている。第一に、ネジ産業は、重要な基盤技術産業であるにも拘らず、管見の限りにおいては、ネジ産業を包括的に述べた論考は数が限られている。即ち、ネジ産業は、産業研究の中で未だ隙間として残されていると言える。第二に、ネジの需要は全産業にあるため、ネジ産業の供給する、ネジの種類や量、質、あるいは用途、流通経路への考察は、産業連関を通して、関連する産業の動態を知る手掛かりになると仮説を立てられることである。

序章では、研究の意義について述べる。同時に、分析対象であるネジ産業が一般には、知られていない産業であることを考慮し、ネジ産業と関連する用語についての定義づけを行う。後半では関連する分野の先行研究にもふれる。第1章では、日本と東アジア諸国（地域）におけるネジの生産量等の統計資料を用いて、産業規模と産業特性を把握する。第2章では、日本・台湾・中国のネジ産業の発展経緯に、簡単に触れた後、各地のネジ関連企業300社に対する、質問票調査の結果について分析を行う。第3章、第4章、第5章は産業史の観点から、各地における産業集積の経緯について紹介する。具体的には第3章は1990-1940年頃の大阪におけるネジ卸商の協調的な取引の成立について述べる。第4章では1940-1980年、台湾南部におけるネジ産業集積の成立の要因と経緯について論じる。第5章は1980-2010年、中国浙江省における、バネ座金生産のために生まれた産業集積を紹介し、外国からの技術や、資本の導入を契機とする産業集積の形成について考える。第6章では、ネジ産業と需要産業の関わりについて論じる、ネジは殆どの場合、最終製品となることはない。然らば、ネジ産業の発展は需要家・需要産業との関係を抜きにしては論じることはできないのである。本章ではこの点について言及する。終章では、総括として産業の特性・産業の成り立ち・産業と需要産業の関係を踏まえたうえで、ネジ産業の競争力について述べる。

さて、課題に対する答えに短く言及しておこう。ネジの商品特性上、多種多様な材質と形状を有すること、生産のための設備機械は、大方において安価で、工程ごとの切り離しが可能である。このことは、ネジ産業は分業構造を生みやすく、また集積することで効率生産が高まると性質を持つと言えるだろう。産業集積の深さと広さが、産業競争力を生み出したと言える。

一方でネジ産業のような中間財を生産する産業は、需要産業との関係に注意を払わなければならない。日本の産業構造自体が、長い間最終製品を頂点とするフルセット産業構造の中で成長したことは留意せねばならないだろう。ネジ産業が発展する為には、常に強い需要産業と連関を持つことが必要と言える。ある意味では、ネジ産業の強さはネジ産業自体にあるのではなく、需要産業の強さに規定されているとも見えるのである。現在、日本のネジ産業が生産するネジの最大需要家は自動車産業である。ここでも、ネジ産業は、その時代の強い需要家に従ったと言える。